

大島清次 元理事長・阿部良雄 元理事を悼む

稲賀繁美

大島清次先生は、現在ジャポニスム学会と改名されたこの学会が、まだジャポネズリー研究学会と称していた時代以来、2002年にいたるまで、22年にわたって理事長を務められた。ジャポネズリー研究学会の発足にあつては、『浮世絵と印象派』さらにはユネスコの企画である『西洋と日本』の編者として国際的にも名声を得ていた山田智三郎先生が、精神的な大黒柱であられたが、発足の当初から、大島先生は、理事長として実務の取りまとめに労を厭わぬ働きをなさつた。山田先生のご逝去にともない、2代目の会長には嘉門先生が就任されたが、大島先生は裏方の番頭役に徹することを是とされた。すでにご存知の会員も少ないのではないかと思われるので、ここで一言注釈を加えるならば、「ジャポネズリー」という用語はボードレール晩年の書簡に見え、学会の欧文名に関して芳賀徹先生より打診を受けた、東京大学外国人教師、ダニエル・シュミット先生のお勧めもあつて、この単語が選ばれた、という経緯があつたかに記憶する。

1979年の学会旗揚げは、おりしも池袋サンシャイン美術館で開催された『浮世絵と印象派』展と連動し、この時には画期的な国際学会が開かれた。その席でも司会を務められた大島先生は、その後まもなく、自らのジャポニスム研究の成果を『ジャポニスム 浮世絵と印象派の周辺』として、美術公論社から出版されている。今では講談社学術文庫に収められた本書が、ジャポニスム研究の機軸を提示し、古典としての地位を得ていることは、いうまでもない。この著書にはジャポニスムの名づけ親であつたフィリップ・ビュルティエの初期の美術批評や、1878年パリ万国博覧会に際して1867年以来の日本美術の感化を詳細に跡付けたエルネスト・シェノーの論文や講演に関して、日本での研究書としては最初期の言及が為されている。その背景には著者のフランス国立図書館版画部での研練があつた。またS.ピング編集による月刊美術雑誌『藝術の日本』を詳しく紹介したのも、大島先生のお手柄に帰すべき成果のひとつとみて語弊はなかろう。アール・ヌーヴォーの立役者となる美術商が、英独仏の三ヶ国語で編集した、この世紀末を代表する刊行物については、大島先生をはじめ、初期の理事の先生方が音頭を取つて、その全文日本語訳が刊行されたことも、創成期の重要な学術的成果として忘れ難い。

これ以降の大島先生のご活躍や学会の動向に関しては、筆者は日本を離れていたこともあり、その詳細を弁じるにはまったくの不適格であることを自状せねばならない。栃木県立美術館の副館長、ついで館長として企画した北関東美術展が県議会で問題となり館長を辞任されたが、その経緯を通じて「日本の美術館行政における良心」との名声を克ち得たのは、大島先生ならでは、と拝察する。その後世田谷美術館の設立に関わつた大島先生は、内井肖蔵設計の建築が施工中の作業現場の仮小屋を事務所として陣頭指揮を取り、2004年にいたるまで二十年近く館長を務められた。その高い見識と、英国を中心とした国際的な知己に裏打ちされた数々の提言が、日本の美術館学芸員の地位向上のために不可欠な貢献をなしたことは、誰にも否定できまい。必要とあれば区議会や都議会からの出頭要請に答えて、文化行政のあるべき姿を熱心に説きつづけたその使命感については、世田谷美術館ご勇退直後にお受けになつたインタビュー記事が「「美術館不要論」の彼方」と題して『あいだ』第100号（2004年4月20日付）に掲載されている。ご自身が将来を託した方々の夭折や左遷の運命を、晩年の大島先生はどのように感じておられたのだろうか。『世田谷美術館、開館17年の軌跡』を筆者は残念ながらまだ手に取っていないが、ジャポニスム学会の事務局もながらく世田

谷美術館に置いていただいた事実を、会員は忘れるわけにはゆくまい。遠藤望様はじめ学芸員の方々のお骨折りがあってはじめて、学会の運営も可能だったことには、あらためて深謝したい。

以下、いささか私事にわたることをお許し戴きたい。2005年5月20日に筆者の勤務する京都の国際日本文化研究センターに、わざわざご講演にお越し戴いた。筆者が主催を命じられた「京都を中心とする日本の伝統工芸 その過去・現在・将来」と題する共同研究会で、メンバーから強い希望があって呼び出したものだった。主治医から風邪を引いたら命取り、外出は出来るだけ控えるようにと言いつ渡されていたにも拘らず、ご息を伴ってわざわざご来駕戴いたことには恐縮した。電話での昔どおりの口調に安心していただけに、すっかりお痩せになって背中が曲がり、酸素吸入器を利用されるお姿を見ると、心が痛んだ。だが、いざ講演に入るや、まことに意気軒昂、お話の内容も、ご自分の生涯をかけた探求に裏打ちされた、壮大といってよい独創的な哲学的考察だった。

翌年の1月だったか、大島先生からお電話があり、ご自分の遺書となるべき原稿をできれば国際日本文化研究センターに寄贈したい、とのお申し出だった。複写の配架を喜んでお受けする旨お答えすると、膨大な生原稿が郵送されてきた。全体は「私の問題」と題され、第一部『「私」の問題 言葉と物 非言語的な視覚概念について』815枚、第二部『「私」の問題－美意識について 「生きること」と「美意識」』1297枚、それにつづき、以前のご著書『人間的とは何か』の続編として、『知の墓標』と題し『「私」の問題 II－言葉について』2882枚。総計4994枚に達する。200字詰原稿用紙に、ご存知の方なら忘れられないあの丹精な手書き文字が克明に刻んである。複写製本して70cmを超える厚さになったかと記憶するが、この出版もご逝去の後、周囲で検討中との旨を仄聞した。このご遺稿に対する筆者の見解は、紙幅の都合で別の機会に譲る。最後となったお電話で、本稿執筆の間、妙なる天上の音楽が頭のなかに終始鳴り響いていた、という至福の様を伺った。

阿部良雄先生は、学会発足時から2002年まで理事を務められたが、周知のように、フランス十九世紀美術批評研究に大きな足跡を残された。日本フランス語フランス文学会会長を務められた経歴が物語るとおり、その本領は、個人による全集完訳の偉業を達成された、ボードレールを中心とするフランス詩の研究にあった。『ボードレール全集』（全6巻）により、日本翻訳文化賞、それにつづく『シャルル・ボードレール 現代性の成立』で和辻哲郎文化賞を受けておられる。同時に阿部先生は、シュールレアリスム研究に至る、美術と言語藝術に跨る独自の視野をお持ちで、日本におけるフランス象徴詩以降の受容に関して、他の追従を許さない学識をお持ちだった（『ひとでなしの詩学』1982）。コレージュ・ド・フランスの招聘教授を務めるなど、フランスの最高学府で通用する見識と語学力、一流の多くの知識人たちとの対等な交友（『西欧との対話』1972）、そして妥協を許さぬ徹底した思索は、内外から、ある種畏敬をもって迎えられた。

ジャポニスム研究との関連でいえば、中期の代表作というべき『群集のなかの芸術家』（1975）のマネを取り上げた章の註に数行の言及が見られるが、そこで Nils Gösta Sandbrad, *Manet: Three Studies in Artistic Conception*, Lund, 1954 が取り上げられていることひとつとっても、その学識の程が悟られる。サンドブラッドは、60年代のマネをその後の印象主義史観に還元することの危険を指摘しているが、この論点は、いやくも絵画におけるジャポニスム研究の方向を見定めるにあたっては、閑却すべから

らざる分岐点をなす。またここには Yvonne Thirion の初期のジャポニズム研究論文(1961)も触れられているが、これは先に述べた『西洋と日本』でベルナール・ドリヴァルが参照したティリオンの博士論文の一部。未公開博士論文など容易に閲覧する機会もなかった当時を思えば、阿部先生の先行研究に対する周到なる目配りには、まことに侮りがたいものがある。またあまり知られていないことだが、阿部先生はニューヨークでの国際比較文学会で天心・岡倉覚三と日本の文化財行政の濫觴に関する学術発表も行っている。そこには十九世紀フランスで文化財保護と修復に生涯を捧げたヴィオレ・ル・デュックへの関心が裏打ちされており、凡百の天心論とは議論の基盤を異にする見解だった。

さらに、その業績を辿るなら、とりわけフランスを中心とするオリエンタリズム絵画研究の意義を問う必要がある。ナポレオンのエジプト遠征、さらにはそれ以前のロココ時代のトルコ趣味に淵源を発する東方趣味は、十九世紀を通じてフランス絵画の主要な潮流のひとつをなした。阿部先生はローザンヌの「生の藝術」館館長、ミッシェル・テヴォの知られざる名著『アカデミズムとそのファンタズム:ジャルル・グレルの想像的写実主義』(1980)にいち早く注目し、学部の授業でそれを読了している。翻訳の出なかったのが惜しまれるが、先生はこの時期からジャン・アラザールの古典的博士論文『東方と十九世紀フランス絵画』(1930)を発掘し、やがて『オリエンタリズムの絵画と写真』(1989)と題する展覧会を巡回企画し、東方趣味に関する啓蒙活動を展開している。これはバブル経済をも背景として、日本に将来された絵画作品を中心に企画された本邦唯一といってよい東方趣味絵画展であり、エドワード・W・サイードの『オリエンタリズム』をも批判的に踏まえた着眼は、フェミニズム批評を含めて議論を招いた。それに先立つ学術論文「アブドル・カーディルの降伏」(『社会史研究』6号、1985)は、単行本未収録だが、阿部先生のオリエンタリズム絵画論の集約であり、突出した貢献である。

狭義のジャポニズム研究がいささか頭打ちとなり、視野の拡大が望まれる今日こそ、Orientalisme から Japonisme への展開を視野に収めたばかりか、その後の Primitivisme にも深い洞察を示す阿部先生の著作は、あらためて吟味熟読されるに値する。残念ながらその晩年の10年近くは、闘病のため、本人の希望したような成果が世に問われることはないままに畢った。だが二十世紀初頭の原始主義研究の先駆者にして、2006年のブランリー美術館の開館とともに再評価されつつある Jean Laude とも親しい知己であった阿部先生の見識は、次世代の若い研究者にこそ引き継がれるべき、貴重なる宝庫だろう。

阿部良雄先生は、その晩年、作家だった父、知二の北京やジャワでの植民地体験を反芻する機会を得た。阿部知二研究に打ち込む若い異国の学徒を支援するため、不自由な体も厭わず応対に意欲を見せる先生の姿勢には、真摯な誠意と熱い友情とが溢れていた。そこには『若いヨーロッパ』(1962)に活写された、50年代末のご自身の留学体験も裏打ちされていたに違いない。その人格には、学問に対する妥協を許さぬ厳格さと、人間に対する寛容なる暖かさとは、常人には許されぬかたちで同居し、独特の詩情を醸し出していた。

理事会のご指名により、蕪辞ながら、おふたりの偉大なる先達を追慕し、その功績を些か顕揚した。より適任の方も多くおられるところ、それを差し置いて、若輩者のご無礼を演じる仕儀となった。記して一言陳謝申し上げる。(Washington, DC., アメリカ合衆国議会図書館にて June 2, 2007)

編集後記

『ジャポニスム研究』第27号を、無事お手元にお届けすることができてほっとしております。投稿論文、研究ノート、展覧会評などに加え、本号には、学会創立時の主要メンバーでいらした三先生を顕彰する追悼記事を組ませていただきました。本学会はこの偉大なる先輩がたを、2006年11月23日には大島先生を、2007年1月5日には嘉門先生を、2007年1月17日には阿部先生をと、ほんの短い間に立て続けに失ってしまったわけです。心よりご冥福をお祈りするとともに、折りしもジャポニスムの包括する分野が、従来考えられていたものをはるかに逸脱して、限りない広がりを見せてきております。昨今、本学会の歴史を振り返り、今後の展望を考える機会を与えていただいたようにも感じております。こういった思いから、2002年に開催された座談会のテーブル起しを掲載させていただきました。学会創立時からの本学会の歩みに思いを馳せながら、今後の活動内容を考える上での縁とさせていただきたいとの考えからです。

いつも表紙図版を提供してくださっている京都服飾文化研究財団ですが、今回から図版の解説も寄せてくださることになりました。本号の表紙を飾る、マリアノ・フォルチュニイの室内着に纏わる興味深い日本との関連が、大変詳しく解説されています。ご好意に厚く御礼申し上げます。また、助成をいただきました石橋財団に対しても、心より御礼申し上げます。最後になりましたが、校正をお手伝いいただいた実行委員の嶋田華子さんと林久美子さんに深謝いたしますとともに、会員諸氏の引き続きの活発なご活動とご支援をお願い申し上げる次第です。

(羽田美也子・橋本順光)

ジャポニスム研究 第27号

Studies in Japonisme, No. 27

(『ジャポネズリー研究学会会報』後継誌)

編集 橋本 順光 (事務局長・会報編集担当兼任)

羽田美也子 (事務局・会報編集担当兼任)

論文査読 論文査読委員会

発行 ジャポニスム学会

東京都新宿区高田馬場 4-4-19

国際文献印刷社内事務センター 〒169-0075

Society for the Study of Japonisme

c/o International Academic Printing Co. Ltd.

4-4-19 Takadanobaba, Shijuku-ku, Tokyo 169-0075

TEL (03) 5389-6243 FAX (03) 3368-2822

E-mail ssj-post@bunken.co.jp

2007年11月30日

制作 (株)国際文献印刷社

Printed in Japan, ©2007 Society for the Study of Japonisme

学会 HP アドレス <http://wwwsoc.nii.ac.jp/japonism/>

郵便振込 振込先 口座番号 00100-7-558061

ジャポニスム学会